

べたのである。今日のカンボジア人は、遊覽客に見ると同じく、フランス考古學者の事業の成果と共に、其の過去の偉大な輪廓の再建を熱情を以て迎へてゐるのである。

三

此の過去といつてもそんなに古い事ではなく、忽必烈汗の遣はした支那旅行家周大觀が、十三世紀末頃、印度の文明が充分入つてゐる半カンボジア文明の猶隆盛なのを見得たのであるが、十四世紀に暹羅の侵入を受け、古都を棄てる事となり、二百年を降らない暗黒時代に入るのである。此の時代が去つて、再び銘文を見るに至つては、以前印度教神殿であつたのが、佛教聖殿となつて了つたので、時には、印度で已に久しき以來廢れてゐる古い修道院の名をも藉りて、一般信仰の中に、之等の寺院を復活したのである。かの三代將軍家光の使者が、アンコール・ヴトに巡歴して齎したのは『祇園精舎』の圖とあるのでも知れる。亦、小乗佛教の名で稱せられてゐる巴利語佛教が、カンボジアの公教であるのも忘れられないが、錫蘭、ビルマ、暹羅のも同じ佛教